

とう しの 塔の越遺跡

所在地 稲沢市長野町・治郎丸町
(北緯35度15分25秒 東経136度48分57秒)

調査理由 都市計画道路稲沢西春線建設

調査期間 平成20年4月～平成21年3月

調査面積 6,150㎡

担当者 石黒立人・鶴飼雅弘



調査地点 (1/2.5万「一宮東・清洲東」)

調査の経過 塔の越遺跡の発掘調査は、都市計画道路稲沢西春線にかかる事前調査として、愛知県建設部都市整備課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として調査した。2年目の調査となる本年は、大江川左岸までを調査区として設定した。

立地と環境 塔の越遺跡は、市域を蛇行しながら南流する三宅川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の東には長野北浦遺跡、西には尾張国府跡、北には清敷遺跡が隣接する。遺跡は、稲沢市教育委員会によって1979年に緊急調査、1985・86年に第1次・第2次の発掘調査が実施され、第1次・第2次調査においては、古墳時代前期の土器群、古墳時代中期の円墳が検出されている。昨年度の調査では、古墳時代の周溝や古代の掘立柱建物群、中世・近世の遺構群が検出されている。

調査の概要 今回の塔の越遺跡の発掘調査では、調査区を東から順にA区、西端をI区と呼んで実施した。その結果古墳時代、古代、中世の遺構が検出された。

古墳時代 遺構はA区を中心に分布する。このうち154SD、149SD、037SDは、直径20mを超える円墳の周溝と推測され、154SDは5世紀後半、149SDは6世紀後半の構築が考えられる。昨年度の調査でも古墳の周溝と推定される溝が検出されていることから、A区では中期から後期にかけて古墳が集中することが判明した。なお154SD、149SDは土層断面の観察から再掘削を受けていることが確認されており、154SD東部では大型の掘立柱柱穴2基の掘削が確認されている。このほか154SDの南東に位置する土器集積182SXからは松河戸式に相当する土師器が、175SKからは5世紀後半の有蓋高杯がそれぞれ出土した。

古代 A区・B区では多数の柱穴・溝とともに井戸状遺構などが分布し、C区からI区にかけては須恵器とともに灰釉陶器を伴う溝や土坑が分布する。

A区では北西方向の溝139SD、177SDや井戸状遺構257SXが構築され、その後北北東を軸線とする柱穴列が確認される。柱穴の中には柱痕が遺存するものも見られ、掘立柱建物2棟、柵列1列が想定される。その後Aa区では西北西に軸線を持つ柱穴列2列および溝が検出され、柱穴列では方形の平面プランから楕円形のプランへの変化が見られた。B区では井戸状遺構046SE、047SEが北北東方向に並んで検出されたが、047SEの底部から方形の底板が出土し、土層断面からも井戸の可能性が高い。

Fd区では北東方向の溝057SDを検出した。上層では8世紀頃の須恵器や灰釉陶器が出土しているが、下層では7世紀にさかのぼるものも一部見られる。Cd区で検出された北北西方向の溝007SDは逆台形の形状を持ち、Fd区東端で確認された落ち込み042SXと同一遺構となる可能性が高い。溝の下層では須恵器が、上層では灰釉陶器が出土する。その後溝の掘削方向が南北方向に変化することが、Fd区031SDなどで確認される。

Cc区では竪穴住居跡3棟を検出し、土層断面上確認されたものを含め4棟が切り合い

を持つことを確認した。このうち015SIでは竈の構築が認められ、長胴甕の埋納状況を確認した。また015SI・016SI床面で灰釉陶器・土錘が出土することから、9世紀頃の構築が考えられる。

中世以降 Ha区では井戸013SKが形成され、埋土から出土した碗・小碗は、初期山茶碗の様相を示す。その後、東西方向の溝がHa区011SKやFd区035SK、Eb区025SXで確認された。Ac区では炭化物の混じる埋土を持つ落ち込みの形成後、掘立柱建物1棟が構築されている。中世後期以後の遺構は、調査区全体を通じて希薄である。

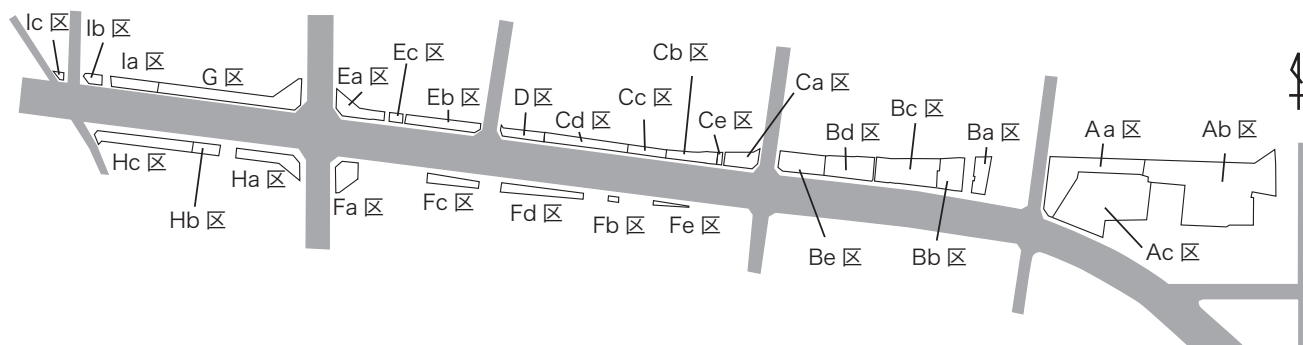
遺物 土師器はAa区・Ab区を除き、相対的に出土量が少ない。調査区全体で最も多く出土する遺物は須恵器であり、古墳周溝からは5世紀後半から6世紀後半の杯蓋・杯身が、その他の調査区では8世紀から9世紀にかけての杯、無台碗、甕などが多く出土した。またA区やD区では臙や円面硯の破片が、またEa区の包含層からは長頸壺がほぼ完形の状態で出土している。瓦については平瓦が数点出土するものの細片が多く、軒平瓦や丸瓦は見られない。

Ab区では瓦塔の破片が1点出土した。これで瓦塔の出土は、1979年調査で出土したものおよび、昨年度塔の越遺跡・長野北浦遺跡の調査で出土したものを合わせ4点となった。このほかCd区007SDでは鉄滓・ガラス滓が、D区で甕の羽口が出土した。なおBd区攪乱土中から尾張型埴輪（朝顔型・円筒型）の破片が出土し、出土地点付近の壁面で古墳の周溝と見られる埋土が確認された。

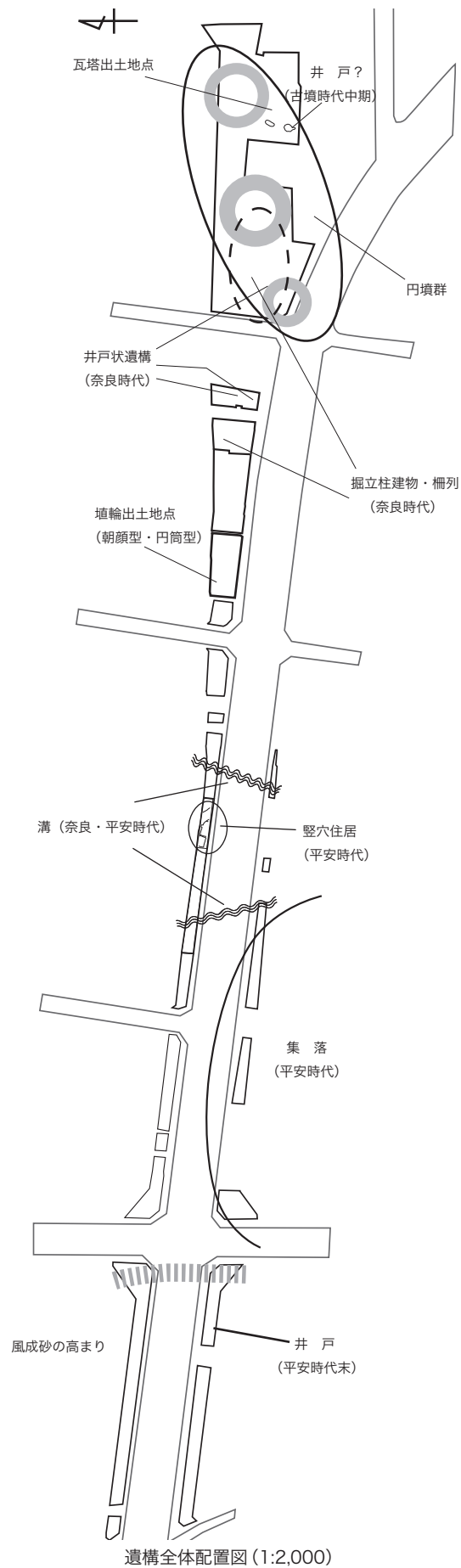
調査成果と今後の課題 今回の調査は東西約600mの範囲に及ぶ。調査の結果、以下の通り遺構の消長を確認することができた。

古墳時代中期から後期にかけ、調査区東部でA区を中心に、古墳と見られる周溝が掘削された。昨年度の調査成果とあわせ、古墳群とも呼ぶべき景観が復元できる可能性が高まった。ただしこれらの周溝から埴輪の出土が見られないこと、稲沢市教育委員会の調査で発見された古墳との相違点を含め、評価・検討する必要がある。

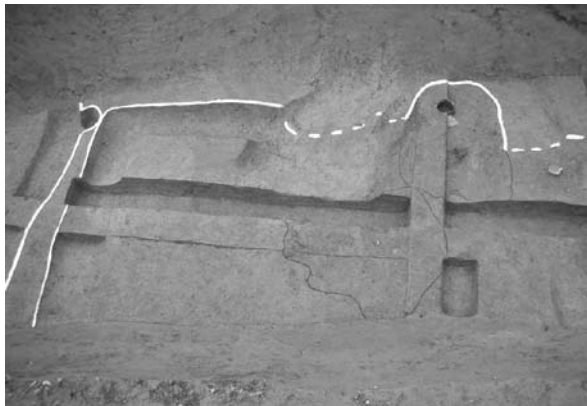
7・8世紀に入るとA区西側からB区にかけて、北北東を主軸とする掘立柱建物や柵列・井戸状遺構が認められ、尾張国府との関連が推測される。しかし古墳の周溝が再掘削されている点などを考慮すると、引き続き祭祀空間が展開したことも考えられる。また井戸状遺構の再検討が必要となったことも特筆される。9世紀以降、遺跡の中心は溝と竪穴住居の分布するC区やF区に移り、集落が調査区より南に広がる景観が予想される。その後中世初頭に井戸が構築されることから、集落の中心が移動した可能性がある。（鵜飼雅弘）



調査区位置図 (1:3,000)



Eb区遺構検出状況



Cc区015SI完掘状況



Cb区028SD完掘状況



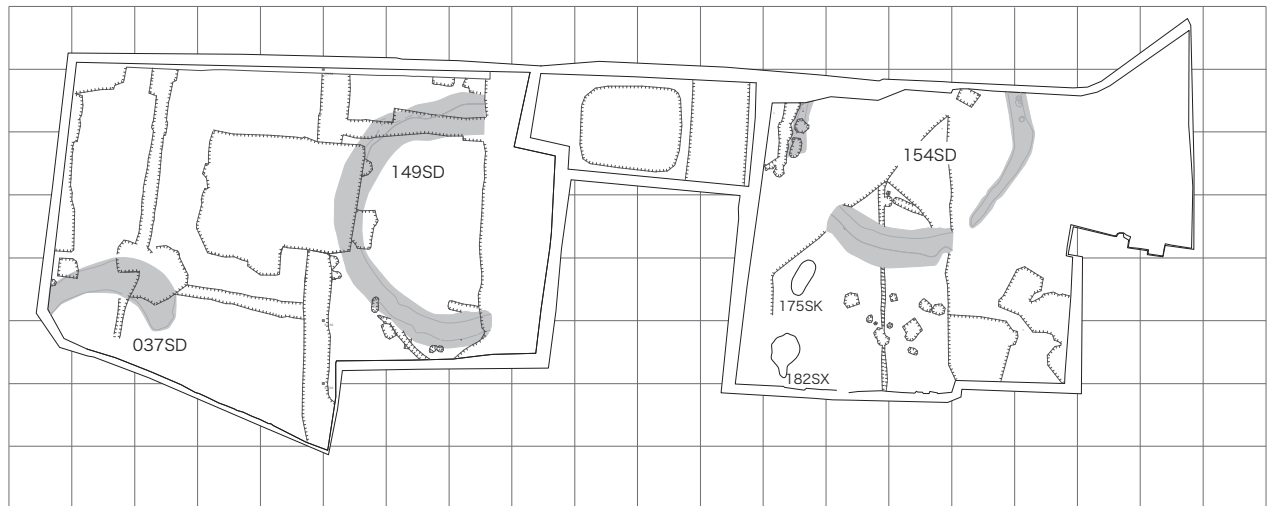
Ac区149SD完掘状況



Fd区025SK遺物出土状況



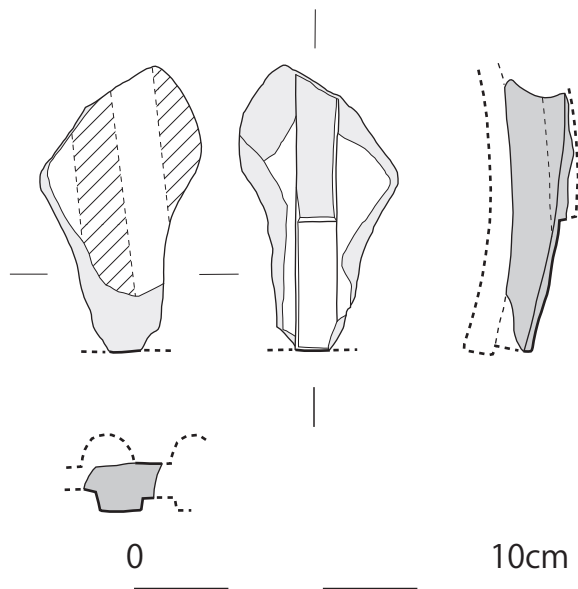
Bb区掘立柱建物



A区古墳時代遺構配置図 (1:600)



175SK有蓋高杯出土状態



Ab区出土瓦塔実測図 (1:2)



154SD内ピット検出状況



182SX土器出土状態



Fa区 1面目遺構検出状況



Ha区 中世井戸



Eb区023SK 遺物出土状況



D区 円面硯出土状況



G区 甗出土状況



Ab区 037SD古代柵列